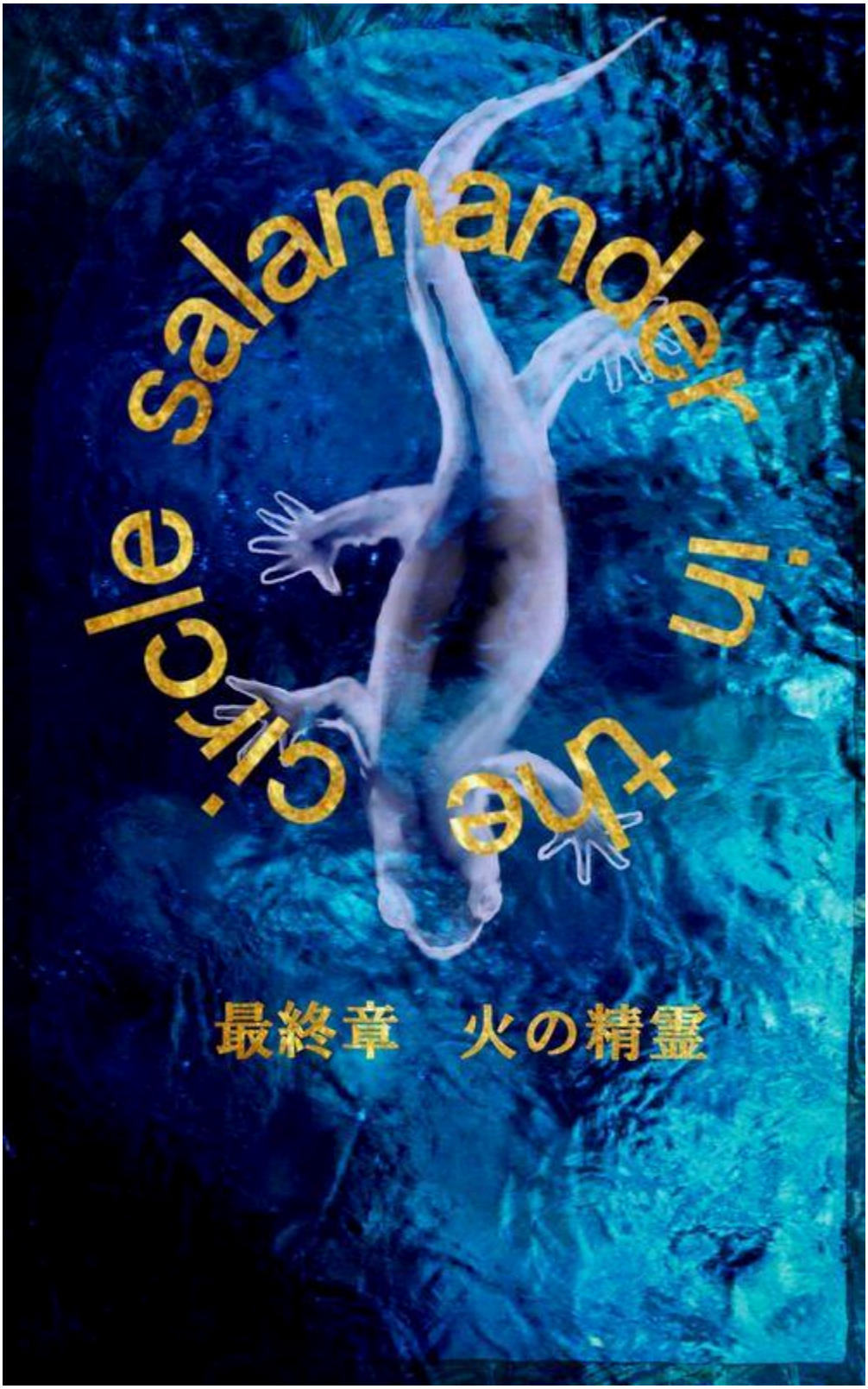


# 最終章　火の精霊

# Salamander in the circle

## 主な登場人物

| | | |
|---|---|---|
| ネウトラ評議会 | ハイヤーン | 本部科学者のリーダー |
| | ティコ | 本部・科学者 |
| | ナシル | 本部・事務職員 |
| | コバーン | 西支部・科学者 |
| | ダーヴェ | 学術調査団・団長 |
| | ヒューダー | 学術調査団・団員 |
| | ヤスウ | 学術調査団・団員 |
| エウメロス王国 | レル・ヴァリス | 王室付近衛隊長 |
| | ヴァリス将軍 | レルの父 |
| | カール | 王子　ヘルガの弟 |
| | ロウナス | 国務省の高官 |
| | アンテロ | レルの副官 |
| | 摂政 | 亡国王の弟 |
| | ヘルガ | 王女 |
| ケストル王国 | パウル | 国王 |
| | ウルリク | 第三王子 |
| | ヘンリク | ウルリクの息子 |
| | ホペオクー | ケストル人の美女 |
| | ソルド | 闘技場の警備隊長 |
| 黄金門市 | 皇帝 | 皇帝 |
| | バイスロイ | 皇帝の息子 |
| | パソネル | バイスロイの参謀 |
| アンベレオ | ソラン | 祭祀長 |
| | レガリオ | 国王 |
| 世界の果ての島 | ホシナ | ホシナ族の族長　マミヤの父 |
| | オマキ | ホシナの妻 |
| | マミヤ | ホシナの娘 |
| | キト・コマ | ホシナ族の男たち |
| | ゴン | ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身） |
| | ヤサカオ | ヤサカオ族の族長 |
| | サノヒコ | 王に仕える者　役人 |
| | フツヌシ | 王に仕える者　将軍 |
| | オモイカネ | 王に仕える者　目読み |
| | トヨケ | タカミムスビ族の長老 |
| | スクナ | タカミムスビのひとり |
| | コタエ | 王の妻のひとり。スクナの妹 |
| | アマノカガセオ | 王の兵士　シトリ族出身 |
| | チドリ | アマセオの妻 |
| | ハマツ | チドリの養父 |
| | タマシギ | ハマツの実子 |
| | ミツハ | メッサナから亡命したメルノの偽名 |
| メッサナ市 | パンテオラ | メッサナ市の総督 |
| | バラム＆バランケ | 双子のジャガー　パンテオラの部下 |
| | メルノ | 音楽生 |
| | メンドルブ | 『化学者の館』代表 |
| | アルチニア | メンドルブの側近 |
| | バルタリス | 総督家のひとり |
| 冥界 | 冥界王 | 冥界の王 |
| | ベネトナシュ | 死神 |
| | テクトリ | 最下層ミクトランの主 |
| | プラトニオ | メッサナを追放された化学者 |

目次

火の精霊
失意
死の神の再来
金星神殿
総督府
進退窮まる
決別
時限爆弾作動
沸騰する黄金
発火
最終章のあとがき
これまでのあらすじ
奥付

# 火の精霊

## 失意

なぜ、こんなことになった……

悪夢の中にいるようだ。彼はそう思った。腕の中にマミヤがいる。その胸に黒曜石の刀子を突き立てて。マミヤを助けてやってくれと、ゴンから預かった短刀は、結局マミヤの命を奪ってしまった。

聞けばゴンはホシナ族の者ではないという。族長の娘にひとめ惚れし、一族を継ごうという一大決心をしてホシナ族にやって来たのだった。元はヤサカオ族という狩猟族だ。食べ物から人生観からまるっきり違う、異世界に飛び込むようなものだ。オレにはそんなマネはできないとヒューダーは思う。

もし、オレたちが巨人族調査にホシナ族を訪れていなければ、今頃ゴンはりっぱにホシナ族の中で頭角を現していただろう。彼が作った短刀は、石の識別といい、加工技術といい、短刀としてのフォルムといい……素人目にも惚れ惚れとさせられた。しかもゴンは利き手ではない方の手で作ったのだ。

モノとしては文字通り諸刃の剣となってしまったが、それはヒューダーからイリチヤ、ヘルガ王女、バイスロイと、関係を繋いだ。

そもそも……レル・ヴァリスとの再会は予想外だった。人口も人材も激減したエウメロスが、この段に至って、この危険な地へ、エウメロスのエースともいえる人間を王女の命令で送り込んできたのだ。それは王女が無事に帰国したことを示すものでもあった。ヒューダーは懐かしさとともに感動のあまり、レルを抱きしめてやりたかったが、

あいにく、そんな状況ではなかった。おそらくバイスロイも似たような気持ちだったに違いない。

〝繋ぐもの〟は愛の証しだと、彼は考える。その逆のものは関係を裂き、断ち切ってしまう。

すまない、ゴン。マミヤを助け出せなかった

ヒューダーは詫びた。マミヤの胸の内を聴いたことはなかったけれども、マミヤもゴンのことを……いつだったかヤスウがそんなことを言っていなかったか？　ヤスウのことだからただの軽口だったかもしれないが。獄中で幾度かマミヤの夢をみた。あの黒髪黒い目の男はゴンではなかろうか。

きっとそうだ

見るからに気性の激しそうな目をしていたゴン。惚れた娘のために己の人生を賭けようとした男だった。彼ならいかなる約束をも果たそうとするだろう。マミヤとの間に家族を成す約束を交わしたとしてもなんの不思議はない。

今わの際のマミヤの「また会える」というつぶやき、あれは、ゴンへのものだったのだろう。

*

冥界の底まで追って追い求めた巨人族の謎をあっけなく解決された時も、評議会の犯した罪を償おうと極刑に臨んだ時でさえ、こんな気持ちにはならなかった。視界が狭く鉛色に閉ざされている。なぜだ。この痛みはなんだ。

マミヤのからだはまだ柔らかみがあり、温もりが残っている。

ふと、レルのことばが耳によみがえった。ホシナ族が来る、と言っていなかったか？
族長が率いて、と。

ホシナ族のいる世界の果ての島は地球の裏側あたり。山中で黒曜石を削ってうると菜を育てていたホシナ族が、海を越えてここへ来る？
かつては世界各地を繋いでいた転送システムも今は存在しない。死神ベネトナシュが面白半分にいじりまわした挙句、壊してしまった。
あり得ない。レルはどうかしている。どう考えても、どうかしている。

けれど、ヒューダーよ
今のおまえにできることは、何だ

それはバイスロイの声だったかもしれない。ヒューダーは苦労して苦笑いを貌に押し上げた。

なにもないさ
できることといえば、航空機を飛ばすことくらいか
レルの言う通り、ここを脱出し、『化学者の館』へ……あそこへ行けばなんとかなるかもしれん

もしかしたら……マミヤをホシナに返してやれるかもしれん……

## 死の神の再来

　レイピアというのがレルの剣である。細身で先端は鋭く尖り、柄とナックルガードには王室付近衛隊長という身分と立場を示す華麗な装飾が施されていて、それ自体がスマートな装飾品のようにも見えるが、相当に重い。王室の人間を守るという職務を遂行するための実用品だから。
　近年わりと平和だったエウメロス王国では近衛隊が大立ち回りを演じるような場面はほぼなかったから、いざ、剣を抜き放つ段になって彼の心は燃えた。剣を抜いたのは主君を守るためではなかった。抵抗する意思もない一民間人の片手首を切り落とし、話し合いの意思のある者に一言も与えず殺害したシパド、聞きしに勝るその非道と理不尽への、彼自身の怒りだった。

　しかしシパド当人は相手の怒りなどどこ吹く風、悠々と髪を乾かした後は悠々と衣装選びである。レルにしても裸の女を斬るなど冗談でもできない性格だったから、相手が着衣し終えるのをじりじりしながら待った。

（落チツケ、ソシテ、気ヲツケロ）、と″守護神″。
（……妙ダ、ナニカ企ンデイル……）

　いわれなくても見ればわかる。シパドが何か企んでいることくらい

　――と。ふっとシパドの金色の直毛がレルの眼前を過ぎった。目くらまし！？　頭を傾けて髪の毛の残像を避けたレルの視界からシパドの姿が消えていた。

「どこへ行った！？」
（鏡ノ中ダ！　追エ！　逃ガスナ！）

　レルの右手が勝手に動き、レイピアの柄頭が女部屋の巨大な姿見を叩き割った。マン

トをかざして飛び散る鏡の破片を避けながら、思った。
　このひと、小うるさいんだか、役にたつんだか、わかんないな

　しかし鏡の中へ踏み込んだとたん、異様な感覚が彼を襲った。地に足がつかない。光量は少なく、空気が重い。あきらかに……通常空間と違う。が、レルが感じている異様さを、バイスロイは既に知っていた。

　レルは生まれて初めて、戦慄というものを実感した。

　これは僕の手に余るかもしれない――

　あろうことか、そこはミクトランだった。

＊

「っはっはっはっはっはっはっは」
　甲高い哄笑。レルの眼前十メートルほどのところにシパドは仁王立ちしていた。しかし本当に十メートルか？　レルは自問する。シパドの背後にはなにもない。左右にも。上下にも。空間を測る目安となるものがなにもない。パースペクティブが失われているという認識はレルを愕然とさせた。

「生きてここを出られないのは、おまえのほうだな」

　シパドの声音は不気味だった。別の人間の声が重なっているような……
　その姿も異様だった。彼女は自分の身長と同じくらいの長大な剣を携えていた。普通に考えて、そんな大きなモノを非力な女の身で扱えるわけがない。が、彼女は平気なようだ。おそろしいほど落ち着きはらい、堂々としていた。

（見ロ、アノ剣ノ、刀身ヲ）

　いわれてみれば――幅広の刀身の中央に真っすぐ、黒い帯状の部分。そこに目の錯覚

か、鈍い銀色にヘビのようなものがのたうち蠢いているではないか。

（呪イノ呪文！　見テハ、ナラン！！）

　見ろと言ったり、見るなと言ったり、どっちなんだ！！

（コイツハ人間デハナイ――）

「ふふふふふふ」
　風が鳴るような含み笑いがシパドらしからぬものだとレルにもわかった。同時に体中がぞぉっと総毛だった。

「ふふ……ふふふふ……ふはははははは……まさか、こんなところに地上界への出口があったとは！　そこをどいてくれたまえ。ぼうや。どかないと、ケガをするよ」

　見るからにずっしりとした長大な剣の柄をシパドは両手で握り、刀身を真横に構えていた。軽々と。

　レルは後ずさりたい衝動を懸命にこらえた。シパドの目はレルの背後にある外界への出口を見ていた。自ら鏡の奥の異空間に飛び込んでおきながら、シパドは外へ出たいのだ。シパドは何モノかに乗っ取られていた。そいつはシパドにとり憑くために彼女を異空間に招き入れたのだ。そして外へ出たいという。

（外へ出シテハナラン！　コイツハ、地上界とミクトランヲ繋ゲル気ダ！　ツマリコイツハ！）

「さ、どきたまえ、ぼうや。まあ、私の名を聴けばいやでも腰がぬけるだろうから、聴かせてあげよう。私はベネトナシュ。ミクトランの王」

　チガウ！！

　バイスロイは一喝した。

　オマエハミクトランノ王ナドデハナイ！　ウスギタナイ死神ダ！！

「ちっ……しょうもないことを。けど、どうでもいいことさ。だって、言ったもんがち、やったもんがちだもんね」

　長剣が真横からレルを襲った。

＊

　ギィンッ――鈍い金属音と共に火花が飛び散った。間合いを詰めてくるでもなく、いきなり襲いかかってきた剣を左手のダガーで受け止めたのは奇跡といえた。体が動いたのは貴公の訓練の賜物だとバイスロイが云って来た。しかし左腕全体がびりっと痺れ、肩に激痛。脱臼したかもしれない。シパドが握っている長剣は接近戦において合金製の鎧を叩き割れるという代物だ。

「ふふん。あっさり斬られていればそんな痛い思いしなくて済んだのにさ。なまじホネがあるってことは、なかなか、辛いよねえ」

「――ベネトナシュとやら。忠告しておく。その女から出て行け。さもないと――」

「いやあ、出て行くもなにも、私はこの女に呼ばれた方でね、お互い気が合うから仲良く手を繋いでしまったというわけ。つまり私たちは一心同体」

「忠告はしたぞ」

　レイピアの切っ先が光のように走った。次の瞬間。

「！！！！！！！」
　シパドとベネトナシュは声もなく絶叫した。長剣を握っていた両手首がまとめてレイピアにくし刺しにされていた――
　間合いもリーチも関係なくどこからでも襲いかかれるという優越感から彼らは完全に油断していた。レルの脱臼した左肩に隠された針のようなレイピアの先端が、両手首が一直線になる微妙な角度と瞬間を狙っていたことに気がつかなかったのだ。

　悶絶するシパドの手から長剣が転げ落ちてぼよんと妙な音をたて、二、三度弾んだ。

（気ヲ抜クナ！　呪文ハマダ生キテイル！）

　ヘビならぬ、呪いの呪文が這ってくる。しゅるしゅるしゅるっと。気味の悪い素早さで這いより、あっという間にレルに躍りかかる。

　左腕は利かず、レイピアはシパドの手首をくし刺しにしている。レルは咄嗟に右手でマントを引きむしってヘビ呪文に叩きつけた。

シパドは蒼白の顔にびっしりと汗を浮かべ、壮絶な三白眼の目をレルに据え、唇を動かしている。呪文を唱えているのだ。レルはダガーを右手に持ち替え、闇雲にシパドに向けて放った。それはシパドの左目を貫いた。

シパドが真正面から受けたダガーは頭蓋を貫通し、後頭部から切っ先が突き出た。一心同体だというベネトナシュをも貫いていた。仰向けに倒れていくさ中、シパドは執念で呪文をつぶやき続けた。その口元は嗤うように歪んでいる。

## 金星神殿

「なんですって！」祭祀長ソランは仰天して振り返った。「イリチヤさまの姿がみえないって、そなたたちが一緒だったのではないのですか！？」

「どこからも干渉されぬよう、厳重な結界を張ってご一緒させていただいておりました。ところが、神殿到着をおしらせしようとしましたがご返答がありません。もしやお加減でもお悪いのかと輿のなかを改めましたところ……」

「いなかったというの！？」

　ソランの顔から血の気が引いた。なんということか。既に儀式の準備はすべて整っているというのに。金星神殿前広場は今は真っ暗だが儀式開始と同時に盛大に火が焚かれることになっている。その瞬間までもう時間がない。

（なんてことなの！！　なにが起こっているの！？）
　混乱したソランは取り乱して歩きまわった。慎重に慎重に準備を重ね、何事もなく、計画通りにきた。たった今まで。だがそれは表面上のことにすぎなかったらしい。なにか異変が起こっている。指呼の間にある総督府の様子がおかしい。レガリオ王の挨拶がされている頃合いなのだがそれに対する歓呼にしては……雰囲気がおかしい。そこへもってきて、神の代理人が行方不明だなんて！！
　本国からやってきた真の支配者、つまり経済界の重鎮たちは老体ぞろいで、地上から数十メートルもの位置に造られた貴賓席に肥え太った体を深々と沈めて高みの見物をしている。五十二年ぶりの大イベントの開始をいまや遅しと、期待と興奮に息を殺し……儀式が終わった後のご馳走にこっそり舌なめずりして。

　その時。
（雷鳴が聞こえたような……？）
　ソランは立ち止まって耳をそばだてた。（気のせい？　でも……あ、また？）

　神殿の最下層、夢見心地で出番を待っていた数十人の供儀たち。ふと正気を取り戻したひとりが、立ち上がり、天井を指さし、ひとことつぶやいた。「落ちてくるぞ」、と。

　それは彼らの酩酊を引き裂くのに十分だった。石の天井が落ちてくるということは――

　激しい叫びがあがった。「こんなところにいては危険だ！」「外へ、外へ出るんだ！！」「早く！！」
　そこここでけたたましい感情的な悲鳴があがり、互いに押しのけあい出口へと殺到する。

　しかし出口の扉が開かない。二重三重に施錠されている。

　貴賓席に駆けつけた黒ずくめの神官はあらぬ方向を指さしながら要人たちの前に額づいた。
「もももも申し上げます、たたたた大変です！！」

「なんの騒ぎだ、供儀どもが逃げ出したか。ならばさっさと捕らえよ！　ふん縛れ！」
「そんなんじゃありません！　本国で大地震が発生した模様！　地面は持ち上がり、ま

たは割れ、または傾き、王都は海へ滑り落ちて行ったとか！　災害の規模は皆目、見当もつかぬとのこと！！　こんなことをしてる場合ではございません！！！」

　要人たちはそろそろと互いの顔を見た。――本国が壊滅？　植民地から富を運び込む港は？　貯めこんだ財産は？

ソランは血相を変えて階段を駆け下りていた。最下層に閉じこめられている数十人の供儀たちを一刻も早く外へ出してやらなければと思ったのだ。ピラミッド内部には重力制御の昇降リフトというものがあるのだが、頭からすっかり消し飛んでしまった。

（気のせいではないわ）
　神殿全体が不気味に鳴動している。どこからともなく、ビシッ、ビシッ、と建物がひび割れるような音が聞こえてくる。きな臭い匂いは石同士の摩擦によるものか。背筋が凍る不気味さだ。
（神殿が崩れる？）
　彼女の直感だった。金星神殿が崩れようとしている！　怒りに身を震わせて！！

## 総督府

　地面から見上げれば総督府本体は巨大な壁となって空へそびえている。巨大なあまり空も見えない。視界はすべて石の壁だ。そんな総督府の前に、人々に新総督の姿を拝ませようと急きょ造りつけられた、かなり小型の台形ピラミッドの形をした祭壇。石のテラス。多少語弊はあるがこれをバルコニーと呼ぼう。

　人々はそのバルコニーを三方から取り囲んで見上げている。

　ヤスウの告発が人々にもたらした衝撃は大きかった。たちまち怒号が沸き起こり、窮地に追い詰められたことを悟ったドゥルはなじるとも大歓迎ともつかない声をあげた。

「遅いぞ妹よ！！　何をしておった――」

　長い金色の直毛を夜風にたなびかせ、ついにベレオーサ総督が登場した。

　ドゥルは思わず生唾をに飲みこんだ。姿かたちはいつもどおりだが、妹はなにか……別人に変わってしまったようだった。異様に気圧されるものを感じ、ドゥルはたじたじと後ずさった。しかし、この場を治めてくれるものなら、別人だろうが当人だろうが、なんでもよかった。ドゥルは腰を低くしシパドをバルコニー中央へと導こうとする。すると、彼女はなにげない動作で何かを床に放り投げた。その時になるまで誰も気がつかなかった。彼女が人間をひとり手にして引きずっていたことを。

　それは異様な姿をしていた。左目にはダガーが突き刺さり、両手首を一本のレイピアがくし刺しにしていた。左目を貫いたダガーをみれば彼が絶命しているのは疑いようがなかった。

「レル・ヴァリス！？　ウソだろ！？　そんな――自分の剣でやられたってのか！？」
　ダーヴェは息を呑んでヤスウを横目で見た。
「レイピアにもダガーにもヴァリス家の紋章が入ってるんだって、ヴァリス家を背負って王家を守るんだって、自慢してやがった。それが――こんな――」

　くくくく……っと、含み笑い。「くくくく……ふはははははは……ヴァリス家というとエウメロスの者か。ざまぁないねえ」

「――――」

「おのれのしたことはすべておのれに返るという言葉を知らないのかね？　ん？　まあ、そういうことだよ」

　つづく甲高い哄笑にドゥルは愕然とした。やはりこの者はシパドではない。シパドであってシパドではない。シパドの個性が数倍、数十倍にも増幅されている。いったい何者――

　ひどく芝居がかった動作でシパドは手を振った。
「なるほど、きみらはこいつの仲間か。ベレオーサに盾突く者めら。こやつらを捕らえよ。神々への供儀に仲間入りさせてくれるわ」

「やめなさい。シパド。それどころではない」
「レガリオ、そこにいたのか」
　シパドは国王を呼び捨てにし、無礼千万な口をきいた。

「アンベレオ本国で大災害が起こった。儀式は中止だ。」

「国王陛下、これはまた滅相もないお言葉」
　言葉は丁寧だが声の底には嗤いが滲んでいる。

「よいか、皆の者、その大災害なるもの、何故か。
　皆の謝意と供儀とをいまや遅しとお待ちかねなのだ。神々は焦れておられるのだ。更なる謝意を！　更なる供儀を！　さもなければ、このベレオーサの地にも大災害なるものが訪れようぞ！！」

　シパドの言葉で群衆の一部は大混乱に陥った。今の話は本当か？　本国の大災害とはなんだ？　なにが起こったのだ？　本国に残してきた家族縁者や財産はどうなったのだ！？

　その時、宙空で何かがきらりと光った。光の点、実体のある光の粒。それはみるみる増えていく。ある者はそれに気づき、誰かがつぶやいた。「――神々？」「神々？」「神々が！？」「まさか――」

　光輝く金色の粒が星屑のように空いっぱいに広がっていく様子は神々しいともいえた。
　本国から国王についてきた人々はもちろん、本心では本国から持ち込まれた怪しげな祭りを胡散臭く思っていた市民も、その光景に目を奪われ、心を奪われた。

「神々の再来だ」という言葉に自ずとうなずいてしまう。やがて光の粒は重みに耐えかねたように、ざああっと、音をたてて人々の上に降った。

　打たれる痛みは神々のお怒りに違いなかった。頭を抱え、きつく目をつむり、ひざま

づいて神々への賛辞をひたすら口走り、赦しを乞えば、「これは金貨だ」という少数の声をかんたんに打ち消してしまった。

## 進退窮まる

「先生、なんですか今の！　空から金貨が降って来やがった！！」
「神さまの降臨らしいですよ。とにかく、ヒューダーたちを探しに行かねば！」
「レルを……このままにしとくんですか……」
「彼にはもうしわけないが仕方ありません。シパドがしっかり踏みつけてましたからね」

　上級賢者でももはやレルを蘇らせることはできないのだ。その身体を回収することもできない。（シパドの注意をひくのは確実だもんな。すまねえ……すまねえ……）ヤスウは歯を食いしばって走った。

　しかし長く走る必要はなかった。廊下の向こうからくるのはヒューダーではないか！

　彼はひとりではなく、無傷でもなかった。
　両腕をベレオーサの兵士に取られて引きずられ、その周りにも後方にも重武装した兵士の姿。

　シパドは魅惑の笑みで彼らを迎えた。
「困るんだよね。きみたち。勝手にどこかへ行かれるとね。きみたちは神々に捧げられるのだ。その栄光を受け入れられないとは」

　やれやれ、といった風情でシパドは肩をすくめ頭を振った。態度は余裕に満ち溢れていたが実は……動転した心の内を隠すものだった。

　ドゥルは（あれ？）と思った。さっきとメンバーがちがわないか？　細っこくて妙な言葉使いをするやつはどうした？
　兵士らに問おうと目をやると、相手は目を合わせようとしない。正面を向いたまま、ドゥルの目を避けている。

（逃げられたのか？　シパドは気づいてないみたいだが？　ま、いいか、気がついたらついたでまたしち面倒くさいことになる。ここは黙っておこ）

「静まれ！　皆の者！」
　総督の一喝で人々は、しん、と静まり返った。先ほどまでの騒ぎがウソのような静けさ。人々の目はバルコニーに立つ総督の姿に釘づけになりながら、耳は別のものをとらえていた。遠い、地鳴りだ。

## 決別

　アンベレオ王国が乗っていた大地は南北数百キロにわたって、実に三十メートルも持ち上がり、海のある東へ向かって激しく傾いた。人が、石造の港や街や城が、庭園や森林が海中へ滑り落ちていく。イリチヤはその光景の一部始終を見ていた。大地が動くと言うのは、恐ろしいというも愚か、身の毛が残らず逆立ち、足が震え膝が折れる、魂が消し飛ぶ衝撃。

　気持ちの悪い冷たい汗にまみれ、この人に関わると必ずこんな思いをするな、と頭のどこかで考えつつ、冥界王の漆黒の衣を掴んで、問わずにはいられない。
「なぜ！？　神々を迎えるまさにその夜に、一体、何故！？」

　冥界王の蒼白に凍った面をみれば、彼にしても予想外の衝撃であることは間違いなかった。それはさらなるショックをイリチヤに与える。力まかせに掴んで揺さぶりたて、問い詰め責めたてる気持ちを抑えきれない。この男が質実とも大きな力を持っているのは周知の事実だから。

「何百年か何千年か知らないけど、アンベレオ王国は神々に尽くして褒め称えてきたんじゃなかったのか！？　その仕打ちがこれ！？　どうして！！！」

　冥界王は揺さぶってくる相手の顔を見ることができない。かつての妻に責められている気がしたのだ。目を逸らし、ひとりごとのように言う。「それは私が知りたい」、と。

「そなたの言う通り、このタイミング、この地域、自然現象とは思えぬ」

「なに――どういうこと――」

「かといって、天空から飛来する神々にできる仕業ではない。とすれば――おそらく――」

＊

　かつて、神々に追随して地球にやってきた者たちがいた。彼らは地球の地母神的元素霊である冥界王に仕えようと、地球に残った。

　彼らは大熊座からの神々として大事に遇され、ミクトランという領地を与えられさえした。しかし、徐々に冥界王の宮廷を蝕んでいく。ひとりは冥界王の后を追い出して宮廷を牛耳り、ひとりは隠れて面白半分のやりたい放題をし私腹を肥やした。それはつい先日まで続いていた。

「地球に残った時の大義を真に受けていたのは、余だけであったのかもしれぬ」冥界王はそう自嘲する。「かの巨人族事件によって、余は彼らの悪質さをまざまざと知った。彼らは己の欲のためだけに存在する、神とは名ばかりの堕落者だ。その所業は許されるものではない。余は与えた領地ごと彼らを追放したが、それは誤りであったか……」

「――――」

「神々が再来する時期であったということだ。彼らは本来同族、地の底と天空から呼び合っているのではないか。ことにテクトリは曲がりなりにも地底の神、アトランティス大陸からアンベレオ王国だけを削り取るくらいのことを考えてもおかしくはない。再来する神々がその考えを形にするのだ」

「そんな――けど、アンベレオはずっと長いこと神々を奉ってきた、なのに？」

「……示威行為……人間に恐怖心を植え付けるためか、あるいは余に対する挑戦か」
　が、と冥界王は胸を張り姿勢を正した。
「心配には及ばぬ。余の拠点はすでにメッサナに移した。儀式もメッサナで行われる。テクトリがなにを目論もうがメッサナにあのような天変地異は起こらぬ。周囲の土地が海のように波打とうがメッサナにそのようなことは起こらぬ。周囲の地が放射能にまみれようがメッサナには及ばぬ。メッサナ、そしてもう一ヵ所、世界の果ての島、それらは特別な地である。ゆえにすべての災いから余が守護しておる」

　意外な地名が冥界王の口から出たが、なにを意味するのかイリチヤにはわからない。冥界王の、妻への愛ゆえだなどということはとうてい思いも及ばない。ただ思うのは、やはり自分にはこの人が理解できないということだけだ。

「地震を起こしたのが地底神テクトリなら、じゃあ、ベネトナシュは――」

　死の神。

　目の前が暗くなり、イリチヤはよろめき、後ずさった。

「どこへ行く？」

「総督府だよ！」

　今、重要人物、見物人、多くの人間が総督府に集まっている。嫌な予感と焦燥にかられてイリチヤは駆け出した。そして、はたと立ち止まり、指から指輪を抜いた。

「どうしようというのか」

「……」
「そは神の代理人の証し。なんぴともそなたに逆らえぬ。傷つけることもできぬ――」

　冥界王は心底不思議に思ったようだった。彼の声音と言葉の意味とまなざしに、イリチヤは己の心がぐらりと揺らぐのを感じた。が、きっぱりと頭を振って、つぶやいた。「いらない」、と。

『オリカルクムの指輪』には長い経歴がある。『9かける3番目の王国』と呼ばれる遥かな遠い時代に、冥界王が去って行く元后に贈ったものだ。
　元后は長い旅の途中で立ち寄った貧しいメッサナで、その指輪をメッサナ発展の礎とした。指輪は持ち主を転々としてメッサナを人的資源を育てる空前の文化都市へと成長させた。
　冥界王に言わせれば、メッサナは彼のものでもあるという理屈が成り立ち、きわめてプライドの高い彼は実際、そう認識していたのだった。指輪は長らく所在不明だったのだが、ある時、彼の眼の前に現れた。元后と同じ顔をし、瞳と髪色とを父親から受け継いだ少年と共に。冥界王はこの時まで、元后は不貞を犯して子をもうけたという讒言を真に受けていたのだった。

　男のなかをどんな思いが通り抜けたものか。いっしゅん、目が動揺に揺らいだようだった。それを見るのは辛いとイリチヤは思った。指輪を床に置いたとき、自分が今、父と名乗る者と決別し、同時に敬愛するヘルガへ別れを告げたのだと知った。

　総督府と金星神殿を一望する異空間から彼は身を躍らせた。飛来する神々、ミクトラ

ンのテクトリとベネトナシュ、冥界王。己の欲望のために人間を犠牲にして憚らぬことでは皆同じだ。そんな者たちへ嫌悪を感じつつ、あまりの嫌悪に押しつぶされ、しり込みして内に閉じこもっていた己の不甲斐なさ。

　幾条ものやり場のない感情が体内で絡み渦を巻き、ついに火がついた。

　今まで彼の変身を拒んでいたのは、金貨の環か、はたまた、オリカルクムの指輪か。あるいはその両方だったかもしれない。なんにしても、今や彼を阻むものはなにも存在しなかった。火の力は無限に外へ向かって迸り、翼竜は甲高い咆哮とともに夜空へ舞い上がった。

**時限爆弾作動**

　それは日付が変わった瞬間でもあった。アトランティス大陸を遠く離れたアンベレオの植民地で大騒動が起こった。宗主国が大地震で壊滅したという話ではない。アンベレオ本国から持ち込まれ、植民地の間で広まっていた金貨が、金ではなくなったからだ。

「これは鉛ではないか！！　荷は金貨と交換する約束だった。はなしが違う！！」
　違約を責めたてる声と共に大きな取引が次々と覆り、市場には投げ捨てられた鉛が転がる。それは見る見るうちにザラザラと鉛色の砂に変わってしまった。神の代理人が刻まれた金貨は幻のように消えてしまった。

　音もなく、時限爆弾が炸裂したのである。変わったのは金貨だけではない。冥界王の顔色もだ。

＊

　イリチヤは上空から街を見おろし、金星神殿がおかしな形に歪んでいるのに気がついた。
　さすがの彼もバイスロイの祈りを金星が聞き届けた結果だとは知る由もないのだが、金星神殿は邪な神々の儀式の舞台とされることを拒んだのである。拒否の意志が美しい台形ピラミッドを崩壊させているのだ。

　その最下層には生贄に供されるべくアンベレオから連れてこられた者たち数十人がいまだ閉じこめられたままだ。

イリチヤの目には最上階から階段を駆け下りるソラン祭祀長の姿が映った。彼はソランを供儀たちを閉じこめている部屋の前へと、一気に移動させた。イリチヤがそう意志するだけでソランは幾層階を短絡したのだったが、動転していた彼女はわずかに目まいを覚えたきりで、そんなこととはまるで気づかなかった。供儀たちの開放をソランに委ね、イリチヤは目を転じる。金星神殿から巨大にして壮麗な総督府ピラミッドを間に挟んだ、向こう側で、なにか起こっている。

総督府前に集中している人々にはあまりにも巨大な石の壁に遮られてなにも見えないだろう。しかしそこではなにか異常なことが起こっていた。

アマセオはその異常事態の真っただ中にいた。

## 沸騰する黄金

化学者たちは館そのものを黄金に変えた。半地下で回転していた巨大な地球儀も、大小さまざまな計測機器、実験機器も、なにもかも。『化学者の館』そのものが、黄金と化して煮えたぎっていた。

アンベレオ侵攻以来、黄金を作りだすこと、例の記念硬貨を作ることが彼らの仕事のすべてだった。反対し、抵抗した化学者は殺され、錬金以外の事項はぞんざいに扱われた。

もっとも、『化学者の館』で扱われていた研究事項はひじょうに有意義でありながら、危険きわまりないものだった。扱う資格のない者にはそれが何を意味し何を引き起こすか、想像すらできないからである。

たとえば、前者は荒野を切り拓き、植生を調える技術、巨石による港湾や街の建造技術、後者は巨人族増殖に使われた技術であり、人間の複製を作る技術である。ドゥルは欲のために黄金門の血を欲し、バイスロイの複製を夢見たのだ。

アンベレオの化学に対する認識は、館の代表者メンドルプを罵詈雑言とともに路上に放り出すという行いひとつとっても明らかだった。つまり、アンベレオに化学を扱う資格はまったくないものと、化学者たちは判断した。彼らの結論は、彼ら自身の命を代償にしても、何も渡さない、というものだった。

*

アマセオはめくるめく黄金の光の真っただ中にいた。空恐ろしいほどの幸福感。肉体が溶けて万物と一体化するような、筆舌にしがたい心地よさ。自分はもう生きた存在ではないのかもしれないとさえ思われた。肉体を持っていたのではたどり着くことのないレベルの――歓び。

己の生涯が眼前で走馬灯のように繰り広げられるさまをアマセオはみた。

機織りのシトリの家に生まれた時、アマセオにはふたりの兄弟がいた。彼らは三つ子だった。三つ子とは王家を継ぐ者にのみ許された存在、つまりアマセオたちはあってはならない者だった。そのために、アマセオをのぞくふたりの兄弟はすぐさま闇に葬られた。しかしアマセオは家業にそぐわない性格の子どもで、武の方面に関心を示す傾向があった。ある時、シトリ家の守護神キジを射殺してしまい、勘当される。

長じた彼は王の軍に属しホシナ族の警護につく。王の直轄として手厚い加護を受けていたホシナ族だったが、王の跡継ぎをめぐる陰謀に利用され、国を追われた。

アマセオには陰ながら彼を助ける者がいた。生まれてすぐ葬られたはずの弟。カガセオは肉体を持たないまま成長して兄との再会を待っていたのだった。そしてアマセオは、妻チドリが彼らの妹だったと今初めて知った。

（カガセオよ、おまえ知っていたのか。チドリのことを）
（まあな）
（まあなって……私は兄弟はみな失われたものと……）
（シトリはこれからも続いていき、世界の果ての島において、為政者のためにではなく、人々とともに生き、大きな役割を果たす。血が絶えなかったおかげでな）
（私の生は無駄ではなかったか）

（なにが無駄なものか。兄者、この沸騰する黄金の光を生身で耐えられる人間がどのくらいいると思っているのだ。その条件はただ心身ともに清浄であること、それだけなのだが。かつてのメッサナ住民ならいざ知らず、音楽生迫害事件によって彼らはその資格を失ってしまった。
『化学者の館』は彼らの持つ知識と能力を誰にも渡すまいと決めた。彼らが強制的に造らされた金貨もすべて鉛に変えた。彼らは館と運命を共にするつもりだった）

（しかしトヨケ様はホシナ族を派遣された）

（化学者の高貴な志と能力を惜しまれたのだ。黄金の沸騰エネルギーはほんの一瞬メッサナを覆っている結界に穴を開ける。ホシナ族なら沸騰の光に耐え、化学者を救うことができる。なんとなれば、今宵は新月。彼らの本質がいかんなく発揮されるというもの）

（……新月とホシナ族？　なんの関係が？）

（彼らは地の精霊。月の影響の最も少ない新月を好む者たち）

　黄金に翻弄されるアマセオにカガセオの言葉を咀嚼する余裕はなく、言葉は意識の上を滑って行った。ただ、黒曜石に携わる者が黄金を自由に操る者の危機に駆けつけるのは、うなずける気がした。

（鉱物と金属は同じ世界に属するものだからな）

＊

　カガセオの言う通り、メッサナ市を覆っていた結界はほんのわずかな時間、破られた。それは新月の夜。

　ホシナ族の……世界の果ての島の王の……石船はそこから進入して『化学者の館』の生存者を回収した。その中にはジャガーの姿もあった。総督府に囚われたまま放置されていたのをパルダリスたちが助け出したのだった。数百頭いたはずの彼らの友は、ほんの数頭にまで減ってしまっていた。

　船はしばらく何かを待つようにとどまっていたが、やがて去った。
　沸騰は徐々に治まり、光は徐々に輝きを失っていき、完全に消え、地上に残ったのはかつて『化学者の館』だった、鉛の山。強靭な結界はまたもとに戻った。

＊

イリチヤは総督府に舞い降りようとした。
上層に階段状に何段も張り出した石のテラス。航空機の発着場。初めて総督府を訪れた時、ヒューダーの操縦する航空機はたしかこのあたりに着陸したのだった。――と――

驚いた彼は人間の姿に戻ってしまい、浮力を失って空中を何メートルも落下した。ひどく無様でひどく痛い思いをしたがそれどころではなかった。
真っ赤な制服はシパドの親衛隊、それが十数人も重傷を負って転がっている。なかには動かない者もいる。明らかに乱闘のあとだ。残忍酷薄非情をまとめて絵に描いたようなシパドの親衛隊をここまで打ちのめすとはいったい誰が――
口のきける者はいないかと探そうとして、はっと気がつく。すぐそこに半開きになった大きな扉。なかに見えるのは航空機のシルエットではないか。

それはまさに彼自身とヒューダーとを海を越えて運んだ、あの航空機だった。機体に評議会のマークが描かれているのだから間違いない。

「ヒューダー！！？」

## 発火

空から降って来た金の粒が神々の怒りなんかではなく、硬貨だとわかったとき、人々はいっしゅん歓喜に沸き立った。だが人々を喜ばせたそれは目の前で、つかんだ手のなかで、懐のなかで、みるみる鉛に変じていく。拾った金貨は実は鉛だった。歓喜は一

転、甚だしい困惑と怒り、底なしの不信が取って代わった。

　そして何を隠そう、死神ベネトナシュは光り輝くものが大嫌いである。ちらりと考えただけで数カ月は意気消沈するという筋金入りの嫌厭ぶりであるから、空から金が降って来たときにはこの世の終わりかと思った。

（一体全体、誰の嫌がらせだ！　こんなおぞましい仕打ちを受けるほどの悪事を働いた覚えはないぞ！！　ええい、こんなことは許されん！！　呪ってやる！！）

　彼の呪いがきいたわけでも、彼を喜ばすつもりもなかったが、金貨は降りながら鉛と化した。言うまでもなく彼は大喜びした。もろ手を突き上げて喜びを表現しようとしたものの、その動きは途中で止まった。彼を見上げる者たちはだれひとりこの状況を喜んでいない。どう見てもまったく逆だ。
　そればかりか、五十二年の間楽しみにしていたご馳走にありつけなさそうだと悟った神々の率直な感情も、頭上から覆いかぶさってくる。

　カネの恨みと食べ物の恨みほど恐ろしいものはないという、ひじょうに厳しい現実に、ベネトナシュは直面していた。

「ぅおおう」耳にするのも苛立たしい奇声をあげてシパドはバルコニーから逃げようとする。しかしレガリオ王に睨まれ、兄ドゥルにあからさまに呆れた目を向けられ、さすがに足がすくんだ。レガリオもドゥルもこの場を逃れてはならぬという感覚を持ち合わせていた。すべては彼らに責任があるのだから。

　しかしベネトナシュにはそんなことは関係ない。どんな非難の目を向けられようとここから逃げ出しシパドの部屋の鏡の奥へ逃げ込まなければならない。そこなら安全――

「待て。妹よ」
　這いつくばっていたドゥルが思いがけない素早さで手を伸ばしシパドの足首を掴んだ。シパドは舌打ちし足を蹴って手を振り払おうとする。しかしドゥルは足蹴にされるのもいとわずなおも両手でシパドの脚を掴む。揉み合う兄妹の背後に、レガリオは、はっと息を呑んだ。

「イリチヤ様――」

＊

　イリチヤは両手で女を抱いていた。胸に黒曜石を突き立てたまま息絶えた女を。

　彼は揉み合うドゥル・シパド兄妹を、レガリオ王を昏い目で見た。そして心臓を取り除かれた二人の男、両手を己のレイピアでくし刺しにされた男の死体を見た。彼らはむき出しの石の床に、モノのように、ただ置かれていた。
　イリチヤは歩み、体格のいい男の死体の傍らに立った。赤銅色の肌にはもはや輝きは見られない。その隣に、そっと、女を下ろした。

「陛下」とレガリオを呼ぶ。「あなたが心を許した友バイスロイは、エウメロスのレルと痛みを分かち合った。レルの苦痛を半分引き受けたのだ。シパド総督、あなたは結局自分の手でバイスロイを殺してしまった……みんな……死んでしまった……」
　あとは言葉にならなかった。片手で面を覆い、声もなく慟哭する。

　やがて立ち上がった彼は言った。
「ソラン祭祀長が陛下を探している。どうぞ、行ってください。〝この人たち〟はここで燃やします。総督は立ち会うように」

　静かだが有無を言わせない物言いは冥界王によく似ていた。それでもシパドはドゥル

の手を振りほどこうとブーツの細いヒールで相手の顔といわず頭といわず蹴り続けている。ドゥルはもはや血にまみれて目が見えない。

「さようなら。陛下」

　ぼっと、イリチヤの周囲を火が囲んだ。ガスコンロのような青い色の炎がイリチヤを中心に立ち上がった。

　ドゥルはつくづく妹を呪った。なにかとんでもないことが起ころうとしているのに、血で目が曇ってよく見えないのだ。国王に指図するこの少年はだれだ。あの青い炎はなんなのだ。そして、ドゥルの曇っていた視界は真っ青な炎に染まった。

　結界の中では神々の不服と人々の深甚な怒りのエネルギーとが混ざりあい、雷雲のように膨れ上がっていた。そしてついに、青い炎によって大爆発を引き起こす。黄金の沸騰をさえ拒んだ結界を粉々に吹き飛ばし、街の外へ野火のように燃え広がって行くそれは、かつて彼を育んだ世界の果ての島の水底の色。

　感情が昂ることもなく、ただ悲しみによって、自身が炎となれることをイリチヤは知った。

ああ

ぼくが欲しかったのは

果たされなかった約束

本当の名前

本当の父と母だ

Salamander in the circle　完

## 最終章のあとがき

メッサナ市のモデルとなったテオティワカン。アステカ族の言葉で『神々が集う場所』。本当はなんという名だったのかわからない。

ピラミッドは天上界・地上界・地下界という世界観を現し、神羅万象あらゆるものに精霊が宿っていた。アステカ神話には百数十の神々が登場する。

メソアメリカで最も古いオルメカから、マヤ、アステカへと、人身御供は延々と受け継がれている。神々に感謝し、活力を与えるため、人間の血と生命を捧げた。コンキスタドールはこれを悪魔の儀式と呼び、徹底的に破壊してのけた。

『神智学大要・A.E.パウエル』や『アトランティスの歴史・scott-elliot』によると…
″アトランティス人種の中でも群を抜いて心身に秀で、活力に溢れていたトルテク族が相当に長いことメソアメリカ地域を支配していた。（ちなみにトルテクとはナワトル語で『建築者』『芸術家』の意）最盛期の人口密度は現代のイングランドやベルギー並みに高かった。支配は14,000年前まで続いた。
トルテク人が起こした最後の大帝国はのちに、北方から来たアズテク人（トゥラニア族の獰猛な一支族）が征服した″

建築技術や天文科学（テオティワカンのケツァルコアトル神殿は天体観測の施設を具えている）は数学の知識、高度な知性を要するもので、人身御供の文化とはどうにもそぐわない。高い文明の遺産があったところへ別種族が来たというのがやはり腑に落ちる。

高度文明は衰退し、進入してきた新しい住民とともにごくごくわずかな断片が最後の大災害を生き延び、再生するために神への人身御供という強烈な文化が生まれたのではないかと、マヤの『ポポル・ヴフ』などから推察できます。マヤ族の祖先は大災害を経ている。『ポポル・ヴフ』からは、マヤ族が奉った神々とは一体全体、本当に神なのかという疑念が湧いてとまらない。人間に血（食べ物）を要求する神々、条件つきで人間と関わる神々。グロテスクな姿をした神々。
アトランティス大陸のど真ん中で、長期に渡って文明が栄えていた場所。ほんとうは何があったのか知りたい。スペイン人は古い文書をひとつ残らず燃やしたというけれど、バチカンにはいろいろ残っていそう。

さて、『Salamander in 』のメッサナ市はアトランティス大陸中央部、アンベレオ王国の北方高地、冷涼で地味の痩せた、ひじょうに貧しい土地で、本国の裕福な人たちは蔑みの目で見ていました。

しかし、そこはやがて知と美の殿堂と呼ばれ、学問と芸術を愛する大都市へと成長していきます。自治領メッサナ市は自分の手で道を切り拓いたのですが、本国では、貧しかった親戚の大成功が気に入らなかった。

この話には斬り合ったり撃ち合ったりの戦争は出てきません。同族間の嫉妬や羨望、妬みといったネ

ガティブな感情が人外の存在を呼び込み、大きな事件に発展していきます。高い精神性を持っていたメッサナ人も集団でひとりの音楽生を精神的生贄にしたことが発端となって地に堕ちてしまった。アトランティス文明終末期の世相はふしぎなほど現代のそれと似ていたといいますが、これが物語の背景となった世界観。
（いじめというのは、精神的にひじょうに幼稚、ひじょうに低次元の行為だとminemuraは思っている）

振り返ってみれば古代日本編がちょっと長かったかなーと。
天津甕星ことアマノカガセオ…そもそも必要だったのかという疑問。じっさい、書いててすごくしんどかった。資料はない（天津甕星に関してはどこにもないんですよほんとに）、見たことも聞いたこともない、そういう世界を描くのはすごくエネルギーがいる。けど、書かにゃならなかったのだ！
もし、また全面的にリライトするなら…独立させようと思う。

ネーミングその他。思いつくままにあげると…

・『9かける3番目の王国』とは、ロシアの民話の多くはこの言葉で始まる。非常に遠い、という意の慣用表現。″この王国は地下にあり、若返りのリンゴがなり、「生命の水」と「死の水」が湧き出して流れ、神話的な蛇や鳥が棲んでいる″

・ベネトナシュはおおぐま座のη（イータ）星。ちなみに『こぐま座流星群』は実在しますが『おおぐま座流星群』というのは創作

・ドゥルとシパドは古代シュメールの王さまの名前

・バイスロイは『副王』ですが皇帝の後継者というか、副皇帝の意味で使いました。本名は別にあったかも

・イリチヤはオーストラリア先住民アボリジニの言葉で槍の意。i（アイ）が三つ続いて言いにくいので本人は気に入ってない

・ホシナは星名。違う漢字で今も地名、人名としてあります。

・パンテオラ、パルダリス、ともに豹族。ジャガーの親玉的意味で使用

・ネウトラ評議会の本部はスコットランドのあたり。この辺に高熱破壊された先史時代の遺跡がある

…このくらいにしときましょう。

物語を締めるにあたって…見落としていることもあれば、後続作のために未解決のままにしているものもあります。
改題前の『火の精霊』と『オリカルクムの記憶』はセットだったのですが、『Salamander in 』から『オリカルクム〜』へはうまく繋がらない気がして。すでに頭が痛い。とはいえ、『nanako-

fifteen』は後続としてちゃんと機能しています。それと…『宇宙船七月号』の主人公たちの祖先は別の角度から『Salamander in　』に関わっている、らしい。

何はともあれ。
2021年夏ごろから書き直し始めて三年。書ける時もあれば書けない時もあり。私的になかなかヘビーな時期でもあり。落ちそうになるのをSalamander inに助けられた観がある。minemuraと「書くこと」は昔（？）からそういう関係にあるみたい。

この物語は悲劇的な終わり方をしていますが、いずれマミヤが見た夢・現代編へと続きます。

お付き合いいただいたみなさま、感謝いたします。ありがとうございました。またお会いする日までしばしのお別れです。ごきげんよう。

2024年7月8日　記

峯村　明

## これまでのあらすじ

**第一部**
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。
ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見えず、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を発った団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。
エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。
エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。
成り行きからヒューダーは少年にイリチヤという名を与え、闘技場で戦うことになる。

**第二部**
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……
一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

**第三部**
黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやって

きたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。
妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちはだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。
ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

**第四部**
母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。
巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。
ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。
世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

**第五部**
　太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェだった。
ダーヴェは仲間のヒューダー、イリチヤと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スクナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチヤに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が

名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチヤ＝槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。
スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチヤはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

**第六部**
テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチヤの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチヤは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチヤだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

## 奥付

Salamander in the circle

**最終章　火の精霊**

2024年7月15日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「月とサカナ」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社

---